

研究発表Ⅱ イメージの歴史、歴史のイメージ

ヴァルター・ベンヤミンとドイツ語圏の美術史家たち

工藤 達也（獨協大学）



フォーラムの発表に当たり、ドイツ二十世紀の批評家であったヴァルター・ベンヤミンの初期の『ゲーテの親和力』と『ドイツ悲劇の根源』を読み直してみた。後者では実際、美術史家の

名前としてリーグルやヴァールブルク、そしてパノフスキの名前が挙がっている。特にヴァールブルクについては、ベンヤミンがゲーテ批評で確立した、批評とイメージとの対立が産み出す弁証法的イメージのコンセプトに相当な影響力があったのではないかと考えて、発表に臨んだ。

ヴァールブルクやパノフスキといった美術史家と同様、ベンヤミンの思想形成も新カント派の影響は大きい。おそらくヴァールブルクと深い親交があったカッシーラーの、「象徴形式の哲学」というカント的人類学の発展は、ベンヤミンの自然史の概念や神話の考察と共通点が多く見られるよう

に思える。

今回の発表では新カント派の超越論的方法な方法を芸術批評にまでベンヤミンが発展させたのと対蹠にルードヴィヒ・クラウゲスを据えて、ベンヤミンとクラウゲス神話学の対決構図を、弁証法的イメージの原型として考察した。時間が足りなかったので詳しくは触れられなかったが、ベンヤミンのゲーテ批評で、美の仮象の概念が「崇高なもの」や「道徳」に對置されるのは、すぐれてカント的な意味を帯びている。美を神話の暴力からの解放というヴィジョンに浄化することにより、ベンヤミンは同時代の文化的な危機的状况をゲーテ批評において凝縮しえた。また、この危機意識はヴァールブルクが十五世紀ルネッサンスに神話的異端との対決を読み取ったことと共通していたと考えられる。

ベンヤミンの初期はしかし、あくまでイメージを救済のヴィジョンにもたらずプロセスとしてあくまで視覚的（光学的）であり、後にベンヤミンは触覚や集団的身体の問題にシフトしていくことになる。後期の「複製芸術論」や「パッサージュ論」の重要な主題はまさしく作業の手なのだ。それはまた別の機会の課題にしたい。

獨協大学外国語学部ドイツ語学科教授。東京大学大学院人文科学研究科課程博士（文学）。東京大学助手等を経て現職。日本独文学会所属。専門はドイツ近現代文学、批評理論（主にヴァルター・ベンヤミン）。主な論文に「媒質と記憶」「記憶と記録」、東京大学出版会、二〇〇〇年、「哲学の焦点としての物」について、「ドイツ学研究」第六十五号、二〇〇三年、「アイヒンドルフ、流涕と哀情の現在」二「ドイツ学研究」第六十八号、二〇〇四年）など。